シニアツアー「コスモヘルスカップ」開催に尽力

永嶋達矢

実業家

ゴルフノチカラ

連載　第301回

健康寿命をどれだけ伸ばせるか。人生100年時代のキーワードを、ゴルフを通じて広げようとしている男がいる。永嶋達矢。PGAインストラクターの顔も持つ実業家だ。26年間、ゴルフ関連の会社に勤め、コロナ禍真っただ中の昨年、起業。ゴルフを通じて予防医療の普及にかかわっている。ゴルフをさまざまな側面から見てきた永嶋が、今、目指していることを聞くと、今後への光が見えてくる。

取材／文・小川淳子
写真・鈴木健夫

ながしま・たつや／1972年3月28日生まれ、東京都出身。株式会社オフィスTADS代表取締役。日本プロゴルフ協会ティーチングプロ。12歳から河川敷の“草ゴルフ”に熱中。中央大学商学部経営学科卒。ゴルフ部でトーナメントキャディのアルバイトを経験。94年、ダンロップスポーツエンタープライズ入社。2001年ワールドカップを担当。06年セガサミーホールディングス入社。20年退社して独立。

ゴルフを通じたさまざまな経験を〝健康〟に生かす活動に取り組む

中央大学ゴルフ部の主将でも「プロになる気はなかった」

2020年11月、越生GC（埼玉県）。永嶋達矢は、プロデューサーとしてシニアツアーの第1回「コスモヘルスカップ」の会場にいた。予防医療に力を入れるコスモヘルス社とシニアツアーの相性のよさに注目し、両者を結びつけたのは誰あろう永嶋だった。

長年の酷使で、シニアプレーヤーの体はみんな、満身創痍（そうい）。そこに、家庭用医療機器を中心にしたコスモヘルス社の商品がマッチしイメージも合う、と考えたのだ。それだけではない。結果的に無観客になってしまったが、本来ならコースに足を運んだギャラリーに、機器を試してもらう絶好の機会。そんなもくろみだった。コスモヘルスとの仕事は、20年3月起業した「オフィスTADS」でのものだが、それ以前の26年間も、ずっとゴルフ関連の仕事をしてきた。

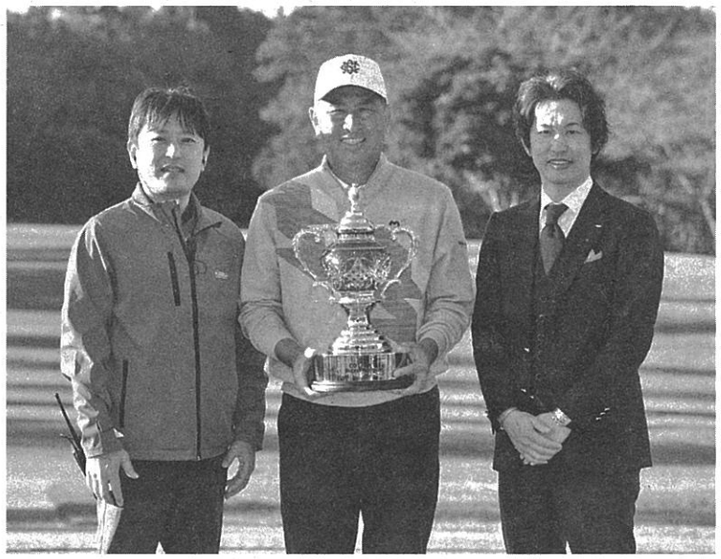
ゴルフとの出合いは中学時代。友人の影響でクラブを握ってみると、あっという間に夢中になった。といっても、いわゆるジュニアゴルフというようなものとは趣が違う。クラブ2本を持って自転車で江戸川の河川敷に行き、自分たちで設定したコースもどきで遊ぶ〝草ゴルフ〟。これが楽しくて仕方なかった。子どもが鬼ごっこをするように、毎日、毎日、自由に遊んでいた。

高校に進学する際は、迷わず、ゴルフができる学校を探した。ゴルフサークルのある中央大学杉並高校に入学し、足立区の自宅から毎日、1時間40分かけて通った。サラリーマンの父に連れられて、ゴルフ場では数回ラウンドしていただけだったが、高校時代は熱心にゴルフに励んだ。

試合に出場するようになると、同学年でとんでもなく上手な者がいるのに驚いた。茨城県・水城高校の横田真一と、神奈川県立秦野曽屋高校の久保谷健一だった。1学年下には同じ水城高校の片山晋呉もいた。いずれも、後にトッププロになる彼らは、レベルが違うことを実感した。

ゴルフ部ではなくサークルだけあって、ビギナーが多い中大杉並高校は「試合で空振りするヤツもいたくらい」という楽しいサークルだった。上井草の練習場でそれぞれが腕を磨き、年3回の試合に出る。永嶋は、ゴルフと勉強、両方に力を入れた。個人戦では3年のとき、日本ジュニアまであと一歩のところまで進んだが、1打及ばずに出場できなかった。

中央大学に進学しても、迷わずゴルフ部。最後は主将も務めたが、



昨年が第1回の開催となったシニアツアー「コスモヘルスカップ」で優勝した水巻善典（中央）。永嶋（左）はプロデューサーを務めた

「ツアー現場の仕事はやりがいがあった。若造がプロゴルファーや社長さんと話すなんて普通はあり得ない。価値ある時間を過ごしていると感じていた」

プロになる気持ちは毛頭なかった。当時のツアーは青木功、尾崎将司、中嶋常幸のいわゆる〝AON〟全盛時代。

「(体が)デカい人たちじゃないとプロでは活躍できないんだな」と、感じていたからだ。

だが、ツアーとはかかわりを持った。学連のアルバイトとしてキャディをしたのだ。金井清一から「帯同キャディにならないか」と、誘われたこともある。一般企業に就職するつもりで内定も出ていたが、縁あってトーナメントの企画・運営などをするダンロップスポーツエンタープライズ(DSE)を受け、入社を決めた。「ゴルフの会社だから」という気持ちがあった。

フェニックス・シーガイアリゾートに赴任した当時の写真。そこでトム・ワトソン(左)とも出会った

セガサミーの里見治会長は「ゴッドファーザーみたいな人」

ツアーの現場が当たり前の職場とあって、1994年4月の入社後はすぐに1カ月半も自宅に帰れない環境に放り込まれる。キリンオープン、中日クラウンズ、フジサンケイクラシック……。試合から試合へ。朝は暗いうちから、夜暗くなるまでゴルフ場で過ごし、走り回る毎日を送り、肌でトーナメント最前線を体験した。

「やりがいがありましたね。普通のサラリーマンだったら、かかわれない人たちと話ができるんですから。すごいプロゴルファーや、主催者や関連会社の社長さんもいる。若造がこんな人たちと話すなんて普通はあり得ない。価値ある時間を過ごしているな、と感じていました」

仕事に慣れてきたころ、大きな仕事を担当した。太平洋クラブ御殿場コースで行われた01年のワールドカップだ。現地に住み込むようにして、米PGAツアーのスタッフと一緒に仕事をしたのは大きな財産だ。出場選手には、全盛時のタイガー・ウッズやデビッド・デュバル、アーニー・エルスらが勢ぞろい。ビッグイベントの準備から携わることで、さらに広い世界を目の当たりにした。

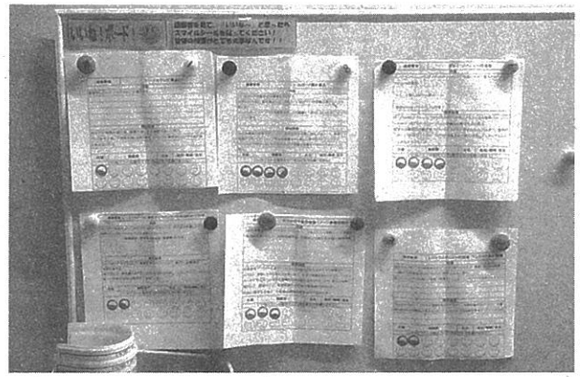
05年には、セガサミーカップ(後に長嶋茂雄INVITATIONALセガサミーカップ)立ち上げにもかかわった。当時、セガサミーホールディングスCEOの里見治氏(現在は会長)と知り合い、グループのザ・ノースCGC所属プロの渡辺司とともに、1年がかりで試合をつくり上げる経験もした。それまでも、積極的にプロの団体やテレビ局などに企画を持ち込むようにしていたことが生きた。

無事、第1回大会を終えた後「ゴッドファーザーみたいなすごい人」という里見氏から「うちに来ないか」と声を掛けられた。青天の霹靂(へきれき)。驚いたが、もともと独立志向を持っていたこともあり、社会勉強をしてみたいと思い、転職を決めた。2年目の大会は立場を変えて、主催者側の人間として臨んだ。

セガサミーホールディングスの里見治会長(中央)の下でもさまざまなことを学んだ

1年間、里見氏のカバン持ちをするようにいわれ、ずっとついて歩いた。時にはプライベートジェットに同乗して、仕事ぶりを間近で見続けた。有名人に会うことも少なくない。一番緊張したのは、セガサミーカップで、ホスト役の長嶋茂雄氏が乗るカートを運転したときだ。「(ザ・ノースCGCの)クラブハウスから18番はけっこうな坂なんです。『こけたら日本中から責められるんだろうな』と思いましたね」と、ハンドルを握る手にプレッシャーがかかった。

大会会場のザ・ノースCGCは、セガサミーグループの経営。そこでの仕事を志願し、運営部部長として赴任。ありとあらゆるゴルフ場経営の基礎を経験する。スタッフと一緒に成長していくことも覚えた。



フェニックス・シーガイアリゾート赴任時代、スタッフの士気を上げるためにスタッフルームに作った「いいね!ボード!」。さまざまなアイデアを募り、賛成者はシールを貼る。その数が多いものに経費をつけて実現。大賞には旅行賞品をつけた

「経費を削るのは、いつでもできるけどしたくない。特に人件費を削るとスタッフのモチベーションを下げてしまいますから。売り上げを上げるには、コースをよくして、サービスの質を上げてリピーターを増やすしかない。お客さんがイメージしていること以上のサービスをすれば、単価は上げられる。そのために経費がかかるなら、いってくれるようにしました。そうしたら、後ろ向きだったムードが前向きに変わったんです」と、実績を残した。

「いいねボード」でさまざまなアイデアを募る

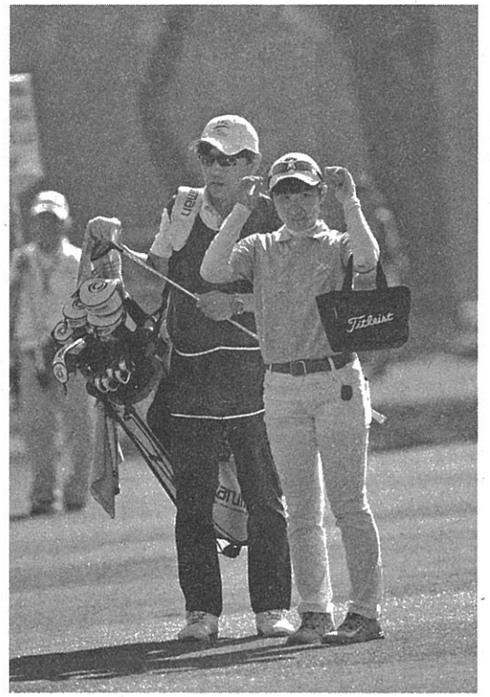
3年たって本社に戻るが、13年には、ダンロップフェニックスの舞台でもあるフェニックス・シーガイアリゾートに赴任する。12年にセガサミーホールディングスが、外資から取得して1年余。新体制設立のための出向だった。

新体制設立後の16年には、執行役員ゴルフ本部長に昇格。フェニックスCC、トム・ワトソンGCの2コースの総支配人も兼任した。スローガンにしたのは「最高のおもてなし」。だが、一つ大きな問題があった。

フェニックスリゾートは、長年ダンロップフェニックスという大きな大会のホストコースを持つことで知られているが、経営は複数回代わっている。当初のフェニックスリゾートがシーガイアとして大きな規模になるときは、フェニックスリゾートも含めた第3セクターの経営になっただけだった。しかし、その第3セクターが約3000億円の負債を抱えて倒産。外資のリップルウッドに買われている。その後に、セガサミーが取得した。

これほどオーナー会社が代わると、スタッフの士気は落ちる。

「宮崎県にはおもてなし気質の方が多いのに、殻に閉じこもっている人が多かった。殻から外に出てきてもらって『好きなことをいっていいんだ』と思ってもらうことが始まりでした。人のメンテナンスから始めたんです」



プロを目指す次女・花音さんのキャディも務める

ゴルフノチカラ
|第301回|
永嶋達矢

永嶋が編み出したのは「いいねボード」の設置という手法だった。

スタッフルームに「いいねボード」を作り、さまざまなアイデアを募る。これに対して、賛成した者はシールを貼って「いいね」の意思を示す。シールの数が多いものには経費をつけて実現させる。大賞には、熊本への旅行という賞品もつけた。

大賞を手にしたアイデアの一つは、クラブハウス前の防犯カメラの向きを変えることで、タクシーがいるかどうかひと目で分かるようにする、というものだった。経費もかからず、これを導入することで、お客さんを待たせることも激減する。まさに「いいね」満点のアイデアだ。こんなふうにしてスタッフが前向きに仕事に取り組む雰囲気をつくっていくことで、大きなリゾートのゴルフ事業部をまとめていった。

次女がプロゴルファー志望でキャディとして帯同も

仕事は順風満帆だが、転勤は多い。家族との生活も、その時々で変わっていった。次女・花音（はなね）さんは、プロゴルファーを志望している。東京で生まれ、父の転勤に伴い、北海道に移り住んだ小学2年生のとき、ゴルフを始めた。実は永嶋は会社員として仕事をする合間を縫って、DSE時代の03年に日本プロゴルフ協会（PGA）指導員助手（現在はティーチングプロ）の資格を取得している。その父の傍らでゴルフを続けた娘は、ゴルフ環境の整った宮崎へとついてきた。

母と長女は東京、父と次女は宮崎での生活。永嶋は執行役員で二つのコースの総支配人を務めながら、日章学園高校に通う花音さんの食事の支度など家事もこなす。試合でキャディをすることもある。

「ジュニアゴルフファーの環境整備にも力を入れたい」

ゴルフを通じたさまざまな活動を展開する永嶋。今後の活躍が楽しみだ

多忙だが充実した日々を過ごした。

セガサミーを離れたのは宮崎から帰京後の20年2月。3月10日には、「オフィスTADS」を立ち上げていた。新型コロナウイルス感染拡大が広がるさなかの起業だったが、不安よりも期待が大きかった。「コロナでいろいろなことが変わるとき。チャンスだと思った」と、あくまでも前向きだ。高校時代の同級生が縁で、コスモヘルスとつながり、トーナメントにかかわることになった。

観客を入れることは叶わなかったが、シニアプロたちとの輪は広がっている。何人ものプロがモニターとしてコスモヘルスの機器を使い、恩恵を受けて健康に近い状態を取り戻している。痛みなくゴルフができていると喜ぶプロも多いという。舞台を平川CC（千葉県）に移して11月に予定されている今年のコスモヘルスカップでは、ギャラリーにもそれを広げられれば、と準備を進めている。

ゴルフの底辺拡大にも力を尽くしている。21年4月からは日本高等学校・中学校ゴルフ連盟のアドバイザーに就任。減少傾向にあるジュニアゴルファーの環境整備にも力を注ごうとしている。また、スポーツ遺伝子分析から、ゴルフ上達のためにコンサルを行う新事業を立ち上げた。ジュニアやプロはもちろん、上達したい気持ちが強いアマチュアにもサービス提供を行うことも始めており、体験した宮里優作や近藤智弘らからいい反応が返ってきている。

ゴルフを通じたさまざまな経験を、健康への道筋として生かそうとしている永嶋。その活動は、企業と業界という狭い世界にとどまらず、外へ外へと広まっていきつつある。ゴルフとともに広がる幸せの輪。その先にあるのは、誰もが笑顔になる日々なのかもしれない。